

„Fluchtlingskrise" によるルクセンブルク・アイデンティティへの 問いかけ アラビア語話者の受け入れによる三言語併用の維持

著者	木戸 紗織
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	59
ページ	43-66
発行年	2018-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127159

„Flüchtlingskrise“ による ルクセンブルク・アイデンティティへの問いかけ

——アラビア語話者の受け入れによる三言語併用の維持——

木戸 紗織

はじめに

ドイツとフランスに挟まれた小国ルクセンブルクは、ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語を併用する三言語併用社会（Triglossie）であり、また多くの外国人が居住していることから、しばしば欧州連合（EU）や欧州評議会が提唱する複数言語使用や多文化共生の実践例として言及される（高橋 2012, 田原 2013 等）。同様の傾向はルクセンブルク人の側にも見られ、2000 年代前半に EU 各国で行われた調査によると、ルクセンブルクでは「ヨーロッパ人」を自任する人の割合が他国に比べて突出している（木戸 2008: 61ff.）。このように、ルクセンブルクはしばしば多言語社会や外国人との共生といったキーワードとともに語られてきた。

しかし、2015 年に発生した欧州難民危機以降、ルクセンブルク社会は転機を迎えようとしている。長引く内戦から逃れた多くの人々が庇護を求めて一度に押し寄せたため、EU 各国では支援のための経済的な負担や治安の悪化などを理由に彼らをヨーロッパ社会に対する脅威とみなし、国境検査の復活や保守政党の台頭など、反難民の動きが広がった。ルクセンブルクも例外ではなく、割り当てられた難民の受け入れについて、試行錯誤が続いている。多言語社会、共生社会の先駆けとして多言語性、多様性をアイデンティティとするルクセンブルクにとって、中東からの難民はどのような存在なのか。本稿では、言語使用を中心に難民とルクセンブルク社会の関わりについて考察する。本稿の構成は以下の通りである。まず第 1 章では、ルクセンブルク社会を特徴づける三言語併用と外国人労働者について確認する。続く第 2 章では、三言語併用体制の崩壊に対する危機感と現行の教育制度が抱える課題を取り上げる。これを踏まえて、第 3 章ではルクセンブルク社会の多様性、多言語性の実態と、アラビア語を母語とする難民が実は伝統的な三言語併用体制の維持にとって有利に働きうることを指摘する。最後に、第 4 章にて本稿の結論を述べるとともに、難民にとってルクセン

ブルク社会への入り口となるルクセンブルク語の新たな役割について考える。なお本稿は、難民の受け入れに直面するルクセンブルクの社会や言語を考察の対象とし、難民の統合について論じるものではない。

1. 多様な言語、多様な外国人

ルクセンブルクは、大公を国家元首とする人口約 59 万人の小国である。2,586km²の国土はドイツ、フランス、ベルギーに隣接し、人口、面積ともに EU 加盟国内でマルタに次いで二番目に小さい。首都は国名と同じルクセンブルク市と言い、国土のやや南寄りに位置する。大学が1校、空港が1カ所という非常に小さな国だが、欧州連合司法裁判所や欧州投資銀行などといった EU の諸機関の他、ロンドンに次ぐ金融センターとして数多くの金融機関が拠点を置いている。その背景には、ドイツとフランスの間に位置するという地理的な条件とともに、三言語併用体制による言語的な障壁の低さがある。

ルクセンブルクでは、1984 年に制定された言語法¹⁾により、国語 (langue nationale)、司法の言語、行政の言語が規定されている。すなわち、ルクセンブルクの国語はルクセンブルク語であり、司法の言語はフランス語である。行政ではルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語を使用することができる。ルクセンブルクは厳密には公用語の規定を持たないが、この言語法で言及されているルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語の三言語が公用語であるとみなされている。

ヨーロッパの多言語国家としてはしばしばスイスやベルギーが例に挙がるが、両国とルクセンブルクは言語の使い分けに大きな違いがある。スイス、ベルギーでは地域によって使用言語が分かれているが、ルクセンブルクでは地域ではなく場面によって言語が使い分けられている。すなわち、私的な場か公的な場か、書きことばか話しことばか、といった条件によって使用言語が異なるのである。本章では、まずルクセンブルク語の特徴とその位置付けについて説明し、続いて三言語を習得するための教育制度について述べる。その後、ルクセンブルクで働く外国人と言語の関係について取り上げる。

1.1. ルクセンブルク語とは

ルクセンブルク語は、ルクセンブルク独自の言語である。言語学的には中部ドイツ語のモーゼル・フランケン方言に属し、国境を隔てて隣接する地域の諸方言と似た特

1) 言語の規制に関する 1984 年 2 月 24 日法 (Loi du 24 février 1984 sur le régime des langues)。

徴を持つ。たとえば、『星の王子様』²⁾の冒頭はそれぞれ以下のように訳されている。完了形か過去形かの違いはあるが³⁾、語彙にも語順にも共通性がうかがえる。

<ルクセンブルク語>

Wéi ech sechs Joer hat, hunn ech, eng Kéier, an engem Buch e wonnerschéint Bild iwwer den Urwald gesinn; *Erliefte Geschichten* huet et geheescht.

<ドイツ語>

Als ich sechs war, sah ich einmal ein wunderbares Bild in einem Buch über den Dschungel, das »Wahre Geschichten« hieß.

このルクセンブルク語は、1984年に制定された言語法第1条により国語であると定められている。ただし、国語を定めるその法文は、ルクセンブルク語ではなくフランス語で書かれている。

Art. 1^{er}. - Langue nationale

La langue nationale des Luxembourgeois est le luxembourgeois.

第1条 国語

ルクセンブルク人の国語はルクセンブルク語である。

このような規定ができた背景には、ドイツ語との差別化を図るという意図があった。1980年、ドイツの民族主義的な新聞が、「ルクセンブルクの自己否定——小国のドイツ・アイデンティティからの逃亡——」⁴⁾と題した記事を掲載する。そこでは、ルクセンブルク語はドイツ語の一方言である、したがって領土的にもルクセンブルクはド

2) De Saint-Exupéry, Antoine: *Le Petit Prince*, New York, 1943. ルクセンブルク語訳は、Roth, Lex: *De Kleng Prënz*, Kordel, 2016. ドイツ語訳は、Varell, Alexander: *Der kleine Prinz*, Weimar, 2015. による。

3) ルクセンブルク語では過去時制を過去形ではなく迂言的な完了表現を用いて表すため、過去形が衰退しているという指摘がなされている。詳しくは、西出佳代「ルクセンブルク語における過去形の衰退：音韻的・形態的観点からの一考察」（神戸大学大学院国際文化学研究科『国際文化学研究』46, 2016年, 29-55頁）などを参照。

4) „Luxemburgs Selbstverleugnung: Flucht des Miniaturstaates aus der deutschen Identität“, *Deutsche Nationalzeitung*, Nr.10, 7. März 1980, München. Sp.5.

イツの一部であるとする主張が展開されていた。ルクセンブルクは第一次、第二次世界大戦ともにドイツに占領されており、とくにナチス占領下では様々な同化政策が行われた。そのため、ルクセンブルク国内にはドイツに対する反感が根強く、この記事を受けて、ルクセンブルク語をドイツ語から明確に切り離し、ルクセンブルク語をルクセンブルク独立の象徴とするという動きが起こったのである。その結果が1984年に制定された言語法であり、その第1条においてルクセンブルク語に国語という法的地位が与えられたのだった⁵⁾。

しかし、先に見た通り、国語を定めたこの法文はフランス語で書かれている。なぜなら、現在のルクセンブルク語は、書きことばとしてほとんど用いられていないからである。ルクセンブルクでは、日常会話にはルクセンブルク語を用いるが、書きことばとしてはドイツ語あるいはフランス語を用いている。たとえば、法文の他にも役所やビジネスの場ではフランス語が用いられる。一方、新聞では主としてドイツ語が用いられる。死亡の公示、求人欄などの特定のページやフランスの新聞社から配信された記事ではフランス語も使用されるが、ルクセンブルク語は見出しや短いフレーズなどにしか用いられない (Vgl. 木戸 2016: 45ff)。ただし、近年では若年層を中心にメールやSNSのような新しいメディアでルクセンブルク語を用いる傾向が見られ (Vgl. Gilles 2009a)、私的な領域では比較的書きことばとして使われる頻度が増えてきた。誰でも執筆可能なインターネット上の百科事典ウィキペディアのルクセンブルク語版では、2018年1月の時点で51,097項目が作成されている⁶⁾。しかしながら、書きことばの分野では未だドイツ語、フランス語が圧倒的である。さらに、話しことばにおいても、日常会話のような私的な場面ではルクセンブルク語が用いられるが、ビジネスなど公的な場面ではフランス語が用いられる。このような状況に鑑みて、法律の言語はフランス語と定められているのである。

こういったルクセンブルク語の現状を端的に表しているのが国籍取得要件である。2008年以降、国籍の取得にはルクセンブルク語の能力証明が義務付けられている⁷⁾。

5) 言語法制定の原動力として、小川は言語団体の影響を見ている。Vgl. 小川 2015: 118ff.

6) 同時期の他の言語と比較すると、日本語版が約109万項目、ドイツ語版では約214万項目となっている。

7) ルクセンブルクの国籍に関する2008年10月23日法 (Loi du 23 octobre 2008 sur la nationalité luxembourgeoise)。

第7条1項b) 当該人が十分な統合を証明しない場合、外国人の帰化は拒絶される。その条件は次のとおりである：言語の規制に関する1984年2月24日法で規定された言語のうち少なくとも一つについて、十分な能動のおよび受動的な知識が証明されない場合、また口語ルクセンブルク

ただし、必要なのは口頭試験のみとされ、ヨーロッパ共通参照枠（CEFR）に照らして会話がA2 レベル⁸⁾、聞き取りがB1 レベル⁹⁾となっている。ドイツ語ないしフランス語については十分な習熟度を要求しているのとは比べると、国語の要求レベルはずいぶん控えめである。だが、社会におけるルクセンブルク語の使用状況を考えると、納得がいくだろう。「社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる（C1）」「いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる（C2）」といった能力はルクセンブルク語には必要なく、そういった場面ではフランス語かドイツ語が使用されるからである。この国籍取得要件は、ルクセンブルク語のあるいはルクセンブルク人の現状に沿った内容と言えるだろう。

ルクセンブルク語の現状を表すものとして、危機言語（endangered languages）に数えられていることにも触れておこう。国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の Atlas of the World's Languages in Danger によると、2009 年以降ルクセンブルク語は「脆弱な言語（vulnerable languages）」に分類されている¹⁰⁾。たしかに、ルクセンブルク語の話者数はユネスコの統計で 39 万人と決して多くはなく、しかも居住外国人の増加¹¹⁾に伴って全人口に占める母語話者の割合は年々減少している。その上、話しことばとしては使われていても、新聞や文書といった書きことばとしてはほとんど使われないこと、日常会話などの私的な場では頻繁に用いられるが、ビジネスや外交といった公的

語の評価試験に不合格であった場合。到達すべきルクセンブルク語力のレベルは、口頭での表現がヨーロッパ共通参照枠のA2、口頭での理解がB1である（翻訳は筆者）。

8) A2 レベルの会話とは、「簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる」。CEFR の習熟度レベルについてはすべて、Council of Europe（吉島他訳、2004: 25）に基づく。

9) B1 レベルの聞き取りとは、「仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる」。

10) <http://www.unesco.org/languages-atlas/index.php> 参照（2018/1/31 閲覧）。

なお、ユネスコの統計にはモーゼル・フランク方言（Moselle Franconian）として掲載されており、話者数にはルクセンブルク他ベルギー、フランス、ドイツの周辺地域も含まれている。一方、ルクセンブルク大学の統計では40万人とされている。これはモーゼル方言を含まずルクセンブルク語のみを対象としているが、ルクセンブルク語を第二言語として学んだケースも含まれている。

Vgl. Fehlen 2016: 28f.

11) 詳しくは第2章にて述べる。

な場ではフランス語に取って代わられることを考えると、ルクセンブルク語は脆弱な言語と言えるかもしれない。しかし、「言語法の制定以来、主に話し言葉において、その使用領域を着々と拡大しつつあり、順調に成長を続けている」(西出 2015: 1) ことから、消滅の危機にあつて法的な保護が必要とされるいわゆる少数言語とは異なっている。むしろルクセンブルク語は、言語変種から独立した言語への発展途中である拡充言語 (Ausbausprache)¹²⁾であり、意思伝達の手段という以上に独立の象徴という確固たる役割を持っていることから、楽観はできないまでも、衰退していると悲観するにはあたらない¹³⁾。

このように、ルクセンブルク語は国家の象徴であり、ルクセンブルク人の精神的な拠り所となっている。が、それにもかかわらず、ルクセンブルク人のアイデンティティはルクセンブルク語にあるわけではない。「ルクセンブルク人の特性である三言語主義 (Trilingualismus) がルクセンブルク人の母語であり、多様性 (Diversität) がアイデンティティの基礎となる」(Goetzinger 2003: 52), 「三言語性 (Dreisprachigkeit), もっと言えば多言語性 (Mehrsprachigkeit) がルクセンブルク人エリートの実際の母語である」(Fehlen 2012: 46), 「ルクセンブルク語を母語としフランス語とドイツ語を教育によって習得する典型的で理想的なルクセンブルク人」(小川 2015: 149f.) とあるように、ルクセンブルク人の中には、ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語の三言語を話してこそルクセンブルク人であるという意識がある。小国であるルクセンブルクは、戦後、北大西洋条約機構 (NATO) や EU の前身である欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) の設立にかかわることで集団安全保障体制の中に身を置き、国土を守ろうとした。その過程で、三言語話者として独仏の仲介役であることが強く自覚され、ヨーロッパ人アイデンティティを土台としたナショナル・アイデンティティが形成されていったのである (Vgl. 木戸 2016: 81ff.)。この一種のねじれ現象はルクセンブルク人の行動規範となっており、三言語話者としてあるいは多言語話者として、外国人とのコミュニケーションでは一貫して相手の言語に合わせる傾向がある (Goetzinger a.a.O.: 48)。

1.2. 三言語を習得するための教育

上記の小川 (a.a.O.) にあるとおり、ルクセンブルク人の語学力は教育によって養われる。ルクセンブルクでは 4 歳からの 11 年間が義務教育となっており、就学前教育

12) Vgl. Kloss 1978: 304.

13) フェーレン (Fehlen 2016: 27ff.) は、人口統計学の視点を取り入れた Demolinguistik の立場から、危機言語に分類されていることを肯定的に捉えている。

(Spillschoul), 小学校, リセの3段階に分けられる。

就学前教育とは小学校入学に先駆けて通う2年間の課程で、ルクセンブルク語の習得を目的としている。ルクセンブルク語はルクセンブルク人の母語であることから主として家庭で習得するが、ほぼ同時期に教育機関でも学習することになっている。さらに、義務教育である2年間の前に1年間の早期児童教育コースが用意されており、任意で通うことができる。小学校に入るとルクセンブルク語の学習時間は極端に減り、他の言語に重点が移っていくため、この就学前教育の間に集団生活を通じて実践的な語学力を身に着けることが求められている。4歳、場合によっては3歳から学習することを考えると、母語の習得も教育に負うところが大きい。

続く小学校では、まずドイツ語、次いでフランス語の習得が目標となる。日本と同様、ルクセンブルクの小学校は6歳からの6年制だが、1年次の学習時間を見てみると、国語であるルクセンブルク語の授業が週1時間であるのに対し、ドイツ語には8時間が割かれている。さらに、原則として、語学を除くすべての科目がドイツ語で教えられる。これは、ドイツ語を授業言語とすることでより効果的にドイツ語を学習させるという意図と、ドイツ語を識字言語とするという意図がある。ルクセンブルク語にはたしかに正書法が存在するが、日常的には主として話しことばとして用いられることから、書きことばとしての需要や、読み書きの学習に適したテキストがごく限られている。一方、ドイツ語は主として新聞などの活字媒体で使われ、書きことばとしての需要が高い。文学作品など学習教材となるものも多く、そもそもルクセンブルク語母語話者にとって系統的に近いドイツ語は比較的習得しやすいという利点がある。これらの事情により、ルクセンブルク人はドイツ語を識字言語として習得するのである。就学前教育のルクセンブルク語学習は、見方を変えれば小学校でのドイツ語学習の準備段階とも言える。ドイツ語は、1億人前後の母語話者を擁する言語としてルクセンブルク語よりもはるかに大きな市場を抱えている。書きことばという国内での需要と大言語という世界的な影響力からドイツ語の習得が重視されているのである。

これと並行して、2年次後半からフランス語の学習が開始される。ルクセンブルク語とドイツ語の言語学的な近さを考えると、ルクセンブルク語母語話者にとってはこのフランス語が実質的な初修外国語となる。そのため、フランス語学習が始まる2年次後半では、ドイツ語が週8時間、フランス語が週3時間であるのに対し、3年次以降はドイツ語が週5時間、フランス語が週7時間と逆転し、フランス語の学習へと重点が移行する。この間も、国語ルクセンブルク語の学習時間はわずか週1時間であり、

両言語との差は歴然である¹⁴⁾。なお、2009 年以降、就学前教育と小学校は連続した 9 年間のカリキュラムとして運営されるようになっており、任意の早期児童教育コースを含む最初の 3 年間はサイクル 1、その後の 6 年間は 2 年ごとにサイクル 2~4 として、全 4 段階で構成されている。

小学校を卒業すると、リセへ進学する。リセには大学進学を前提とした普通課程（リセ・クラシック）と、普通教育と並行して職業訓練を行う技能課程（リセ・テクニク）があり、小学校の成績によって進学先が分かれる。どちらの課程も前期 3 年間と後期 4 年間に分かれており、前期修了までが義務教育となっている。リセのコースは多岐にわたるが、どのコースでも引き続き語学の授業が行われ、技能課程より普通課程の方が時間数が多く、また英語やラテン語など第 3 外国語の学習が組まれている。さらに、前期から後期に進むと授業言語がドイツ語からフランス語に代わり、フランス語の能力を強化する仕組みとなっている。ルクセンブルク語母語話者であれば比較的容易に習得できるドイツ語とは違い、フランス語の能力は個人差が生じやすく、言い換えれば学力の証明となる。しかも、ドイツ語が話しことばとしてはほとんど使われないのに対し、フランス語は書きことば、話しことばの両面において使用され、なおかつ公的な場にふさわしい十分な語学力が求められる。そのため、富裕層や知識人はフランス語を好み、ステータス・シンボルとして用いる（Neuhausen 2001: 41）が、労働者階級の子供は親のフランス語能力が低く、社会的に上層の言語であるフランス語に対しネガティブな反応をする傾向が見られる（Davis 1994: 155ff.）。このように、ルクセンブルクではフランス語の能力が学歴を表す一種の社会的ステータスとなっている。

もともとフランス語は、15 世紀のブルゴーニュ公国時代にルクセンブルクへ導入され、1795 年再びフランスの支配を受けた際に指導者層が用いたことで、以後公的な言語として認識されるようになった。国民がドイツ語話者であるにもかかわらず¹⁵⁾、司法、行政分野や高等文化面ではフランス語が支配的であり（トラウシュ 1999: 95）、この状況が現在まで続いている。さらに今日では、行政機関だけでなく企業間のやり取

14) ベルク（Berg 1993: 34）では、ルクセンブルク語の学習時間が 0.5 時間と報告されており、この時間さえも教師によってはドイツ語の学習に振り替えてしまうという。これと比較すれば、この 20 年ほどの間にルクセンブルク語の学習時間は多少見直されたと言えるかもしれない。

15) ルクセンブルクは 1839 年を独立の年としているが、この年までルクセンブルクは西のフランス語地域と東のドイツ語地域からなっており、フランス語話者とドイツ語話者を抱えていた。ところが、1830 年に勃発したベルギー独立革命の余波を受けて、1839 年に西側の国土をベルギーへ割譲することになり、ルクセンブルクは東側のドイツ語地域のみとなって、今に至っている。

りなどビジネスの分野でもフランス語は不可欠な言語となっている¹⁶⁾。このような実用性に加えて、言語調査 (Fehlen 2009: 189ff.) の結果からは、ルクセンブルク人がフランス語を格調高く洗練された言語と見なしていることがうかがえる。ルクセンブルク人にとってフランス語は習得が困難な言語だが、それゆえにprestigeが高く、また格調高く洗練された言語という肯定的な言語観も手伝って、ルクセンブルク人にはフランス語を積極的に使用する傾向が見られる (Vgl. 木戸 2014: 22f.)。

1.3. 多様な外国人労働者 – 居住外国人と越境通勤者

ルクセンブルクはEUで二番目に小さな国だが、国民一人当たりのGDPが世界で最も高く、失業率も6.4% (2016年) と低いことから、経済的にたいへん豊かであると言える。そのため、多くの外国人労働者が働いている。ルクセンブルクで働く外国人労働者には、国内に居住する居住外国人と、国外からルクセンブルク内の職場へ通う越境通勤者の二つのケースがある。

まず、居住外国人について見ていこう。ルクセンブルクの人口に占める外国人の比率は、2017年の時点で47.7%と人口の約半分を占めている。1991年には29.4%だったが、2001年には36.9%、2011年には43.0%と年々高まっており、50%を超える勢いである。居住外国人の内訳は、最も多いのがポルトガル人で居住外国人全体に占める割合は34.4%、以下フランス人が15.7%、イタリア人7.6%、ベルギー人7.1%、ドイツ人4.7%、イギリス人2.2%、オランダ人1.7%と続き、以上を除くEU加盟国出身者が12.2%、その他が14.6%となっている¹⁷⁾。総人口については、2001年には384,400人だったものが2017年には590,700人と大きく増加しているが、その内訳を見ると、ルクセンブルク人が約27万から約31万と微増であるのに対し、外国人は約11万人から約28万人と倍増している。すなわち、ルクセンブルクでは国内に居住する外国人が年々増加しており、それにしたがって外国人比率も高まっているのである。それにもかかわらず、失業率は2000年の時点で2.4%、世界金融危機が起こって以降の2010

16) フェーレン (Fehlen 2009: 159) の調査によると、回答者の8割以上が仕事上フランス語が不可欠であると回答している。一方、ルクセンブルク語とドイツ語については、公企業の場合6~7割の回答者が両言語が不可欠であると回答しているが、私企業の場合、両言語が不可欠と回答しているのは4割強となる。

17) なお、全人口に占める割合としては、ポルトガル人16.4%、フランス人7.5%、イタリア人3.6%、ベルギー人3.4%、ドイツ人2.2%、イギリス人1.0%、オランダ人0.7%、その他のEU加盟国出身者5.8%、その他7.0%となる。ルクセンブルク人は52.3%。ルクセンブルク統計局STATECの調査に基づいて、筆者が算出した。数値はすべて小数点以下第2位を四捨五入している。

年には5.8%と増加しているがそれでもEU加盟国内では非常に低く、今でもその水準を維持している。居住外国人はルクセンブルク経済の重要な担い手であることから、職場でも生活の場でもルクセンブルク人と同等の立場にあり、両者は良好な関係を保っている。

続いて、越境通勤者について見ていこう。隣国からの越境通勤者は、2016年時点で180,900人おり、人口のおよそ3割に相当する。そのうち被雇用者176,600人の内訳を見てみると、フランスからが最も多く88,600人、次いでドイツからが44,200人、ベルギーからが43,800人となっている¹⁸⁾。したがって、昼間人口としてはルクセンブルク人309,200人に対し、外国人労働者の合計は462,400人となり、外国人の方がルクセンブルク人を大きく上回ることになる。

ところで、居住外国人、越境通勤者を合わせた外国人労働者の内訳を見てみると、ロマンス語話者が多いことに気がつく。居住外国人の内、ポルトガル人、フランス人、イタリア人を合わせると居住外国人全体の6割弱を占める¹⁹⁾。越境通勤者を見てみても、フランス人がその約半数を占めており、ベルギー人についても隣接するワロン語地域から通勤している可能性が高いと想定されることから、ロマンス語話者の割合はさらに高くなると考えられる。先に述べたように、ルクセンブルクではフランス語の使用範囲が広く、またその能力が重視されている。このような環境がロマンス語話者を引き付けていると考えられる。

外国人労働者の多くがロマンス語話者であることから、非ルクセンブルク語話者がコミュニケーションに参加する場合、ルクセンブルク人はフランス語を用いる傾向がある(Gilles 2009b: 189)。とくにビジネスの場ではフランス語が主流であることから、ゲッツィンガー (Goetzinger 2003: 48) はフランスやベルギーからの越境通勤者がフランス語しか話さないことに言及し、コミュニケーション上の障害を取り除くことだけを目的とすればわざわざルクセンブルク語を習得する必要はなく、場合によってはフランス語を話す方が有利になると指摘している。こういった状況に加えて、ルクセンブルク人が相手に合わせてフランス語を話す傾向にあるとすれば、越境通勤者だけでなく居住外国人についても同様のことが言えるだろう。外国人労働者がルクセンブルク人を大きく上回るような状況では、経済活動に関して外国人労働者に負うところが

18) これとは逆に、ルクセンブルク国内に住んで国外へ越境通勤しているケースは12,300人(2016年)で、その大半(10,400人)が国際機関の職員である。

19) ベルギー人の母語は明らかではないが、別の統計(Fehlen 2016: 37)によると、ベルギー人のうち77.5%が主にフランス語を話すと回答し、オランダ語ないしフラマン語を話すとは回答したのは9.5%となっている。

大きく、ルクセンブルク人が常に主導権を握っているわけにはいかない。本来ならルクセンブルク語やドイツ語を使うような場面でも、外国人労働者の求めに応じてフランス語を用いるケースが少なからずあるだろう。すでに多くの研究者によって、フランス語がルクセンブルクのリングア・フランカであるという指摘がなされている (Gilles a.a.O.: 194, Weber 2009: 106f., 小川 2015: 173)。

2. フランス語偏重への危機感

このような状況下で、ルクセンブルク人はフランス語のプレゼンスが高まっていくことに不安を抱いていないわけではない (Gilles 2009b: 191)。とくに問題が表面化しているのは教育現場である。居住外国人の増加によってロマンス語を母語とする子供が増えているにもかかわらず、現行の教育制度はあくまでルクセンブルク語母語話者を前提としているため、矛盾が生じている。本章では、現行の教育制度に関する二つの立場を取り上げる。

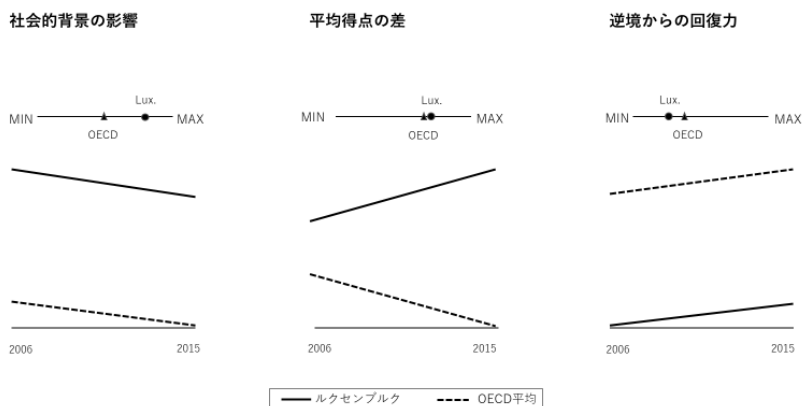
2.1. 教育制度に対する問題提起

国内の居住外国人が増加するのに伴い、ルクセンブルク語以外を母語とする子供が増えてきた。教育省の調査によると、2010年度の小学生（6～12歳）のうち47.4%が非ルクセンブルク人である。だが、言語別に見てみると非ルクセンブルク語母語和者は56.1%と、半数を上回っている。ルクセンブルク語母語話者と非母語話者の割合は2008年を境に逆転し、その後も差を広げている²⁰⁾。

先に述べたとおり、現行の教育制度はルクセンブルク語母語話者を前提としており、言語の系統的な近さを生かしてルクセンブルク語－ドイツ語－フランス語という順ですべての公用語を習得するようカリキュラムが組まれている。しかし、ルクセンブルク語を母語としない子供にとっては、このシステムが大きな障害となっている。多数を占めるロマンス語母語話者は授業言語であるドイツ語の習得が遅れがちになり、そのために授業内容が理解できず成績不振に陥ってしまう。この傾向は学年が上がるにつれてより顕著になり、ルクセンブルク語母語話者と非母語話者の進学率には大きな差が生じている (Vgl. Davis 1994)。

20) „Luxemburgisch als Muttersprache rückläufig“, *Luxemburger Wort*, 3. Mai 2012, Sp. 16. なお、同年の人口に占める外国人比率は43.1%である (STATEC 2010: 9)。

OECD による生徒の学習到達度調査 (PISA)²¹⁾でも同様の傾向が指摘されている。2015 年に行われた調査では、科学的リテラシー、数学的リテラシー、読解力全てにおいて、ルクセンブルクは OECD 平均をやや下回っていた。PISA の場合、ルクセンブルク人自身も母語で試験を受けるわけではないため²²⁾、学力の評価については考慮すべき点がある。しかし、OECD の分析によると、ルクセンブルクでは親の職業や教育といった社会的背景が子供の学力に対してかなり影響を与えており、家庭環境の差によって得点に差が出る割合が OECD 平均よりやや高く、また不利な家庭環境にある生徒が良い成績を上げている割合は平均を下回っているとする (図 1 参照)。上述のデバイスの指摘の後も、親の社会階層や家庭環境が子供の学力に影響するという構図は改善されていない。



<図 1>

このような格差を解消するために、ヴェーバーは一部のクラスでフランス語を授業言語とすることを提案している (Vgl. Weber 2007, Weber/Homer 2010)。現在、小学校

21) PISA: <http://www.compareyourcountry.org/pisa/country/LUX?lg=jp> (2018.1.31.閲覧)

22) ルクセンブルク向けには、ドイツ語、フランス語、英語版が用意されている。ルクセンブルク語母語話者は概ねドイツ語版を選択すると思われ、15 歳児が 6 歳から学習を始めた言語で試験に臨むことになる。

の授業はドイツ語で行われているが、これと並行してフランス語を授業言語とするクラスを設けることで、ロマンス語を母語とする子供たちの理解を促し、学力格差の解消を目指すとしている。対象となる子供たちにとってフランス語は必ずしも母語ではないが、ルクセンブルク語母語話者がドイツ語によって識字を行うことから、同様にフランス語をロマンス語母語話者の識字言語にするという考え方である。

しかし、このフランス語クラスの設置は未だ実現されておらず、政府はあくまで、就学前教育の間にルクセンブルク語の能力を強化し、現行の制度へ合流させる方針をとっている。その背景には、フランス語クラスの設置がルクセンブルクのアイデンティティである三言語併用の喪失につながるという根強い反対意見がある。フランス語クラスが設置された場合、その受講者はロマンス語母語話者であろう。先に述べたとおり、ルクセンブルクではフランス語のprestigeが高く、通用範囲も広い。したがって、フランス語クラスの受講者はルクセンブルク語およびドイツ語を十分に習得しない可能性が考えられ、フランス語のみの単言語話者になると想定される。その結果、現行のドイツ語クラスを受講した三言語話者とフランス語クラスを受講したフランス語話者に分かれてしまい、最終的に三言語併用というルクセンブルクのアイデンティティが失われるのではないかと懸念しているのである(田村2010: 39f.)。田村(ebd.: 34)によると、今までに行われた実験的なプロジェクトでは、ドイツ語クラスとの学力差は解消されなかったという。また、居住外国人の側からも、ドイツ語クラスを選択した同級生との乖離を懸念する意見があり(ebd.: 39)、子供に与える心理的な影響も無視できない。

こういったことから、政府は現行の制度を維持しようとし、入学後の躰きに関してはあらかじめルクセンブルク語の能力を強化することで対処している。義務教育の就学前教育に先駆けて任意の早期児童教育コースが設置されているが、これは非ルクセンブルク語母語話者を想定している。この任意のコースを受講する子供は、3歳から公教育によってルクセンブルク語を学習することになる。先に述べたとおり、就学前教育は集団行動を通してルクセンブルク語の実践的な能力を養うことを目的としているが、子供たちは仲間内でのコミュニケーションを通じてルクセンブルク語を身に着けるとともに、ルクセンブルク社会への帰属意識を深めていくことも期待されているのである。

2.2. 三言語併用体制の崩壊に対する不安

ルクセンブルク人は、三言語話者として相手の言語に合わせる傾向があり、またフランス語の使用に積極的である。しかし、ルクセンブルク人が相手ならルクセンブル

ク語やドイツ語を用いる場面で、相手の要求に応じてフランス語を使うというのは、実際面では通常の対応であっても、心情的には葛藤がないわけではない。ルクセンブルク語で話しかけた相手に“Parlez français!”（「フランス語で話してください!」）と返されるのを不公平に感じていないわけではないのだ（Goetzinger 2003: 48）。

フランス語使用の拡大は、ルクセンブルクのアイデンティティである三言語併用の形骸化を意味することから、フランス語の急速な拡大には危機感がある。その対策として、就学前教育を義務化し、子供へのルクセンブルク語教育を徹底することで現行の教育制度へ組み込もうとしている。話しことばとしてのルクセンブルク語は書きことばとしてのドイツ語と一体であるから、三言語併用の維持は、いかにルクセンブルク語を習得させるかにかかっているのである。

3. „Flüchtlingskrise“ とルクセンブルクのジレンマ

2015年夏ごろから、EUへの難民申請が急増した²³⁾。2015年7月からの1年間では、シリア出身者がおおよそ48万人と最も多く、以下アフガニスタン（約22万人）、イラク（約17万人）と、中東出身者が多数を占めている。同期間の受け入れ人数を見てみると、最も多いのはドイツで約64万人、以下スウェーデン（約14万人）、ハンガリー（約13万人）と続き、ルクセンブルクも2,765人を受け入れている。一度に多くの難民が押し寄せたため各国で難民受け入れに反対するデモが起き、„Flüchtlingskrise“と呼ばれるに至った。難民の配分を巡って加盟国同士も対立し、「多様性の中の統合（In varietate concordia）」というEUの理念が大きく揺らいでいる。では、ルクセンブルクのアイデンティティである多言語性（Fehlen 2012: 46）や多様性（Goetzinger ebd.: 52）はどうか。本章では、難民を「非ヨーロッパ人」「非ロマンス語母語話者」という二つの視点で捉え、難民とルクセンブルク社会の関わりについて考察する。

3.1. 非ヨーロッパ人としての側面－多言語性、多様性への問いかけ

中東からの難民を非ヨーロッパ人という視点で捉えたと、次のような問いが生じる。ルクセンブルクが多言語性や外国人労働者の多様性はヨーロッパに限定されたものなのではないかということである。ルクセンブルクで用いられている言語は言い換えれば独自の言語と隣国の言語であり、また人口の半数近くを外国人が占めているものの、そのうち85%はEU加盟国の出身者である。つまり、言語に加えて歴史や習慣といっ

23) 当時（2015年下半期）、ルクセンブルクは欧州連合理事会の議長国を務めており、問題解決のために主導的な役割を果たすことが求められていた。

たバックグラウンドにも多くの共通点を持ち、さらに宗教に関しても大半がキリスト教徒であろうと考えられる。難民が主としてアラビア語を母語とするイスラム教徒であることと対照すると、ルクセンブルク社会は多様と言いつつ実際には非常にヨーロッパ的であり、極めて均質な社会であると言わねばならない。

したがって、難民から見たルクセンブルクは、ドイツをはじめとする他の国々と同じく、あるいはそれ以上に言語的にも宗教的にもなじみのない国である。ルクセンブルクの側にも、アラビア語話者のイスラム教徒という従来とは大きく異なる外国人の受け入れには少なからずためらいが見られる。しかし、難民の受け入れを拒むこと、すなわち多言語性の限界を認め社会の多様性に制限を設けることは、ルクセンブルクの在り方を否定することにつながりかねない。そのため、ルクセンブルクとしては難民をただ人道的措置として庇護するだけでなく、今までの居住外国人と同じように社会へ受け入れていく姿勢が求められる。今回の難民危機による非ヨーロッパ人の受け入れは、多言語性、多様性を旨とするルクセンブルク・アイデンティティの試金石となるだろう。

3.2. 非ロマンス語母語話者としての側面－将来的な三言語話者として

では、中東からの難民を非ロマンス語母語話者として捉えるとうか。アラビア語母語話者である彼らは一見ルクセンブルク社会との接点がないように見えるが、実際には非ロマンス語母語話者として従来の教育制度に吸収しやすい存在なのではないだろうか。

例として、子供たちの学習状況を見てみよう。まず彼らはアラビア語母語話者だけで編成された少人数のクラスで学ぶ。子供たちの年齢は様々だが、学力にそってクラス分けされ、それぞれに応じた授業が行われる。その際、授業言語はドイツ語であり、これと並行して学校外の機関でルクセンブルク語を学ぶ。アラビア語母語話者にとって、ドイツ語とルクセンブルク語を同時に学ぶことは相当な負担であろう。そこで、教育省は外国人子弟の就学支援事業（Service de la scolarisation des enfants étrangers: Secam）の一環として、外国人と周囲との仲介役となる *Kultureller Vermittler*（*Médiateurs interculturels*）を派遣している。仲介役は朝スクールバスで子供たちとともに学校へ向かい、授業中は必要に応じてアラビア語で子供の理解を助ける。中には就学経験のない子供もいるため、教員の手助けをする場合もある。学習面でのサポートと並んで、子供たちの心理面のケアも行う。子供たちは、授業中のふとしたキーワードや何かの作業をきっかけに、自身のつらい経験を語ることがある。その話に耳を傾け、トラウマの克服を手助けすることも仲介役の役割である。彼らの仕事は単なる通訳ではなく、

新しくやってきた外国人に、ルクセンブルクでの生活や習慣、法などについて教えることである。自身が移民である彼らは、自らの経験を踏まえて適切な助言を与えたり、質問に答えたりして、外国人と役所、あるいは外国人と周辺住民との仲立ちとなる。子供を通じて成人の統合を図るという方針により、子供と一緒に帰宅した後、生活上の相談や役所での手続きのサポートなど家族向けの支援も行う。この仲介役は、1998年には5名だったが2017年には74名に増員されている。28言語に対応していて、言語別にみると最も多いのがポルトガル語の16名、次いでアラビア語の15名となっている。コミュニティの大きさを考えると、このアラビア語話者の多さは注目すべきであろう。この仲介役の助けを借りて、子供たちは遅くとも一年後には通常の小学校へ編入する。編入を急ぐのは、難民が社会から断絶されるのを防ぎ、できるだけ早く社会に包摂するためである。そのためには、やはり日常会話のためのルクセンブルク語と小学校の授業言語であるドイツ語の習得が欠かせない。アラビア語母語話者にとって両言語の習得は容易ではないが、ルクセンブルクの側から見れば、彼らはロマンス語母語話者よりも現行の学習システムに吸収しやすい存在であると言える。



<図2 アラビア語話者向けのドイツ語の授業²⁴⁾>

一方、成人に関しては事情が異なる。例として、外国人の定住を支援するある NGO

24) „Das war wie eine Explosion“, *Luxemburger Wort*, 20. Juni 2016. (<https://www.wort.lu/de/politik/fluechtlingskinder-in-der-schule-das-war-wie-eine-explosion-5763d1cfac730ff4e7f62157>: 2018 年 1 月 31 日閲覧)

の取り組みを見てみよう。移民労働者支援団体（Association de Soutien aux Travailleurs Immigrés: ASTI）は、移民のための投票権獲得と平等の実現を目的として 1979 年に設立された。“vivre, travailler, décider ensemble”（共に暮らし、働き、決める）をモットーに、現地の住民と外国人の相互作用を重視して、外国人、地域住民双方に向けた活動を行っている²⁵⁾。今回の難民問題を受けて、ASTI は労働対策プログラム “Connections” を開始した。これは亡命申請者向けに行っていたプログラムを中東からの難民向けに改めたものである。希望者は、まずルクセンブルクに関する一般知識や難民の権利と労働権について学び、その後各自の職歴や技能に応じて就職活動を行う。選考に漏れた場合は、就職活動の仕方や履歴書の書き方について助言を受けつつ、資格取得の援助、インターンの斡旋、職能訓練といったサポートを受けて就職活動を継続する。語学については、ASTI の場合ルクセンブルク語とフランス語のコースを提供している²⁶⁾。先に述べたとおり、ルクセンブルクで就労するにはフランス語が不可欠である。私生活についても、フランス語で済ませることは可能である。だが、地域で孤立せず近隣住民との信頼関係を築くためには、ルクセンブルク語を習得することが望ましい。そのため、成人に関してはルクセンブルク語とフランス語の習得が優先されることになる。そうすると、居住外国人と同様彼らがこの後ドイツ語を習得するとは考えにくく、三言語話者となる可能性は低いと言わざるを得ない。とはいえ、就労目的のロマンス語母語話者に比べると、彼らはフランス語に依存することがなく、また国籍取得のためルクセンブルク語の習得に対するモチベーションが高いことから、三言語併用を維持しようとするルクセンブルクにとっては好ましい存在であると言える²⁷⁾。

注目すべきは、どちらの取り組みにも母語話者が介在していることである。子供の場合は、小学校の教員が授業を行い、アラビア語を母語とする仲介役が間を取り持つ。

25) たとえば、外国人向けには子供の学習支援やレクリエーションの提供、地域の清掃活動、シニアの交流会などを企画している。一方、住民向けには移民フェスタや住民との交流会などを企画し、生活圏における人的交流を促進している。

26) アラビア語母語話者を対象としていることから、授業はアルファベットを習うところから始まる。受講者の中には、出身国で英語を習う機会がありすでにアルファベットが書ける場合がある。その一方で、女性を中心に出身国で読み書きを習っていないケースもある。

27) 2016 年 9 月 22 日付の *Luxemburger Wort* 紙には、「フランス語ではなくルクセンブルク語を学びたい」と話すイラク人女性のインタビューが掲載されている。彼女自身はまだルクセンブルク語を勉強中だが、彼女の息子はすでにルクセンブルク語を習得しているという。（„Ich will Luxemburgisch lernen, kein Französisch“, <https://www.wort.lu/de/lokales/fluechtlinge-berichten-ich-will-luxemburgisch-lernen-kein-franzoesisch-57e2d247ac730ff4e7f66c10>: 2018 年 1 月 31 日閲覧）

成人の場合は、母語話者が講師を務め²⁸⁾、教育省が教材²⁹⁾を作成して学習を支援している。多言語話者だからと言ってルクセンブルク人がアラビア語を習得するには至っていないが、母語話者を介在させることで、相手の言語に合わせたコミュニケーションを実現しようとしている。

4. まとめ

ルクセンブルクは複数の公用語を持ち人口の半数近くを外国人が占める国として、多言語性、多様性をアイデンティティとしてきた。そして、三言語を話し、常に相手の言語に合わせることで、ルクセンブルク人はそのアイデンティティを支えてきた。しかし、„Flüchtlingskrise“によって難民を受け入れたことでアラビア語母語話者、イスラム教徒という新しい外国人像が加わり、その結果、ルクセンブルク社会は多様と言いつつ実際には非常にヨーロッパ的で均質的な社会であることが明らかとなった。もちろん彼らが来る以前から非ヨーロッパ人はルクセンブルクに居住している。だが、とりわけ今回の出来事によって、多言語性、多様性というルクセンブルクのアイデンティティが問い直されているのである。一見すると、アラビア語話者である難民はルクセンブルク社会にとって未知の存在である。しかし、非ロマンス語話者である彼らは、子供を中心にルクセンブルク語－ドイツ語－フランス語という従来型の教育課程に吸収することができるため、フランス語の偏重に悩むルクセンブルクとしては好ましい存在である。将来的に三言語話者となりうる彼らは、ロマンス語話者よりもより一層ルクセンブルクが多言語性の維持に寄与するだろう。

彼ら非ロマンス語母語話者の登場によって、ルクセンブルク語は新たに統合の言語としての役割を得つつある。高橋（2012: 70）は、外国人の割合がさらに高まるとフランコフォニー化が進み、ルクセンブルク人の中に外国人への反感が生じる恐れがあるとし、その場合フランス語への偏重を修正する社会的な力が作用して、三言語主義のバランスを保つべくルクセンブルク語の会話力がこれまで以上に求められるとなると述べている。フランコフォニー化への抵抗とルクセンブルク語の重視は、図らずもロマンス語を母語としない外国人の登場によって生じようとしているのではないだ

28) 講師の中には、自身も今回難民としてルクセンブルクへ渡り、職能を生かして講師の職を得たというケースもある。

29) アラビア語－ルクセンブルク語辞書や、バルシャ語－フランス語辞書など。Wörterbuch と呼ばれているが、正確には二言語ないし三言語の単語を対照させたものである。ルクセンブルクでは外国人向けあるいはルクセンブルク人向けにこのタイプの辞書が多数発売されており、中には五言語併記などもある。

ろうか。ルクセンブルク語およびルクセンブルクの三言語併用は、新しい外国人像の登場によって転換点を迎えている。

<参考文献>

- Berg, Guy: “*Mir wëlle bleiwe, wat mir sin*” *Soziolinguistische und sprachtypologische Betrachtungen zur luxemburgischen Mehrsprachigkeit*, Tübingen, 1993.
- Council of Europe: *Common European Framework of Reference for Languages; Learning, Teaching, Assessment*, 2001. (邦訳: 吉島茂, 大橋理枝他訳編『外国語教育Ⅱ-外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社, 2004年)
- Davis, Kathryn Anne: *Language planning in multilingual contexts: policies, communities and schools in Luxembourg*, Amsterdam, 1994.
- De Saint-Exupéry, Antoine: *Le Petit Prince*, New York, 1943. (Roth, Lex: *De Klengé Präenz*, Kordel, 2016. Varell, Alexander: *Der kleine Prinz*, Weimar, 2015.)
- Deutsche Nationalzeitung*, Nr.10, 7. 3. 1980, Sp. 5, München.
- Fehlen, Fernand: *BaleineBis: Une enquête sur un marché linguistique multilingue en profonde mutation - Luxemburgs Sprachenmarkt im Wandel*, Luxembourg, 2009.
- Fehlen, Fernand: Elitensprache in Luxemburg. In: *forum* 314, Esch/Alzette, 2012. 41-46.
- Fehlen, Fernand: *Die Luxemburger Mehrsprachigkeit - Ergebnisse einer Volkszählung*, Bielefeld, 2016.
- Gilles, Peter (a): Jugendsprachliche Schriftlichkeit auf Luxemburgisch in den Neuen Medien. In: Wirtgen, Georges/ Berg, Charles/ Kerger, Lucien/ Meisch, Nico/ Marianne, Milmeister (S.L.D.): *Savoirs et engagements*, Differdange, 2009. 166-175.
- Gilles, Peter (b): Luxemburgische Mehrsprachigkeit; Soziolinguistik und Sprachkontakt. In: Elmentaler, Michael (Hg.): *Deutsch und seine Nachbarn*, Frankfurt a. M., 2009. 185-200.
- Goetzinger, Germaine: Aspekte der Sprachwahl am Beispiel der Luxemburger Polyglossie-Situation. In: Delwaide, Jacobus/ Michels, Georg/ Müller, Bernd (Hg.): *Die Rheingesellschaft; Mentalitäten, Kulturen und Traditionen im Herzen Europas*, Baden-Baden, 2003. 45-53.
- Kloss, Heinz: *Die Entwicklung neuer germanischer Kultursprachen seit 1800*, Düsseldorf, 1978.
- Luxemburger Wort*, 3. Mai 2012, Sp. 16.
- Neuhausen, Ingo: *Das Französische in Luxemburg, Eine Sprache im romanisch-germanischen Kontaktbereich*, Siegen, 2001. (Dissertation)

STATEC Luxembourg: *Luxemburg in Zahlen 2010*, Luxembourg, 2010.

STATEC Luxembourg: *Luxemburg in Zahlen 2016*, Luxembourg, 2016.

Weber, Jean Jacques: Rethinking Language-in-Education Policy in Luxembourg. In: *forum* 264, 2007. 24-26.

Weber, Jean Jacques: *Multilingualism, Education and Change*, Frankfurt a. M., 2009.

Weber, Jean Jacques/ Horner, Kristine: Orwellian doublethink: keywords in Luxembourgish and European language-in-education policy discourses. In: *Language Policy* 9, 2010. 241-256.

小川敦『多言語社会ルクセンブルクの国民意識と言語 ―第二次世界大戦後から1984年の言語法、そして現代―』, 大阪大学出版会, 2015年

木戸紗織「ルクセンブルクが多言語社会に関する考察」, 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター『都市文化研究』第10号, 2008年, 53-66頁

木戸紗織「ルクセンブルクにおけるフランス語使用拡大の背景 ―外国人労働者の増加とルクセンブルク人の言語観―」, 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター『都市文化研究』第16号, 2014年, 15-27頁

木戸紗織『多言語国家ルクセンブルク―教会にみる三言語の使い分けの実例』, 大阪公立大学共同出版会, 2016年

高橋秀彰「岐路に立つルクセンブルクの3言語主義」, 関西大学外国語学部紀要 第6号, 2012年, 59-72頁

田原憲和「言語共同体の形成とルクセンブルク文化の創出」, 「立命館法学」別冊『ことばとそのひろがり (5)』, 2013年, 165-187頁

田村建一「ルクセンブルクにおける言語教育の課題」, 京都ドイツ語学研究会『京都ドイツ語学研究会会報』第15号, 2001年, 58-69頁

田村建一「ルクセンブルクが多言語教育と外国人児童生徒」, ルクセンブルク学研究会『ルクセンブルク学研究』第1号, 2010年, 21-45頁

ジルバール・トラウシュ著, 岩崎允彦訳『ルクセンブルクの歴史―小さな国の大きな歴史』, 刀水書房, 1999年

西出佳代「LaF (Lëtzebuergesch als Friemsprooch) の現状: 外国語としてのルクセンブルク語教育と言語の拡充との相互作用」, 北海道大学ドイツ語学・文学研究会『独語独文学研究年報』41, 2015年, 1-21頁

Luxemburger Wort (Online) <http://www.wort.lu/de>

Association de Soutien aux Travailleurs Immigrés (ASTI) <http://www.asti.lu/>

Service de la scolarisation des enfants étrangers (Secam) <https://portal.education.lu/secam>
eurostat <http://ec.europa.eu/eurostat>

Frage nach der luxemburgischen Identität vor dem Hintergrund der „Flüchtlingskrise“

– Arabisch-Muttersprachler und Triglossie –

Saori KIDO

Luxemburg ist ein kleines Land mit etwa 590.000 Einwohnern. Luxemburgisch, Deutsch und Französisch sind Amtssprachen, und der Ausländeranteil an der Bevölkerung beträgt 47,7%. In diesem Artikel betrachte ich die Identität Luxemburgs, die von der europäischen Flüchtlingskrise verwandelt wird.

In Kapitel 1 beschreibe ich die Dreisprachigkeit in Luxemburg. Diese drei Sprachen werden im ganzen Land je nach den Situationen benutzt und jede nimmt dabei eine eigene Rolle ein. Besonders wichtig sind Luxemburgisch und Französisch. Luxemburgisch hat die Rolle eines Symbols nationaler Unabhängigkeit und unterstützt als National- und Muttersprache den Luxemburger auf emotionaler Ebene, obwohl seine Verwendung hauptsächlich auf die gesprochene Sprache beschränkt ist. Französisch hingegen ist die am häufigsten verwendete Sprache. Es wird in öffentlichen Situationen verwendet, und es ist die einzige Sprache, die sowohl für das gesprochene als auch für das geschriebene Wort verwendet werden kann. Für Luxemburger ist es ein Beweis der Fähigkeit oder des hohen Status, aber für viele ausländische Arbeiter ist es die am leichtesten verfügbare Sprache. Deswegen kann man die Sprache als die praktische aber autoritative Sprache betrachten. Im Vergleich zu diesen beiden Sprachen ist die Bedeutung von Deutsch gering, das in erster Linie nur als Schriftsprache verwendet wird. Allerdings ist auch es die Sprache der Alphabetisierung für die luxemburgischen Muttersprachler. Deutsch ergänzt die luxemburgische Sprache, die selten als Schriftsprache verwendet wird. Somit ist die Bedeutung der Sprachen nicht gleich, aber jede hat auch eine Funktion, die nicht durch die anderen Sprachen ersetzt werden kann. Aus diesem Grund haben Luxemburger die Auffassung, dass Luxemburgische Bürger diese drei Sprachen verwenden sollten, d.h. seine Identität ist die Verwendung der drei Sprachen statt der Nationalsprache

Luxemburgisch. Trotzdem oder deswegen tendieren sie dazu, bei der Sprachwahl dem Wunsch der Gesprächspartner zu entsprechen. Weil in Luxemburg etwa die Hälfte der Bevölkerung aus Ausländern besteht, ist die Wahrscheinlichkeit groß, dass der Dialogpartner ein Ausländer ist, insbesondere ein romanischer Muttersprachler. Kurz gesagt, gemäß der Forderung von romanischen Muttersprachlern wird Französisch verwendet, selbst in Situationen, in denen Luxemburgisch oder Deutsch verwendet werden sollte.

Allerdings bedeutet dies nicht, dass Luxemburger keine Angst davor haben, dass Französisch mehr und mehr Gewicht gewinnt. In Kapitel 2 stelle ich zwei Positionen zum aktuellen Bildungssystem vor. Nach der OECD-Analyse hat der soziale Hintergrund der Eltern erheblichen Einfluss auf die schulischen Fähigkeiten der Kinder in Luxemburg. Obwohl die Zahl der ausländischen Arbeitnehmer steigt und damit auch die Zahl der Kinder, die meistens romanische Muttersprachler sind, zunimmt, wird in der Grundschule in deutscher Sprache unterrichtet. Diese Diskrepanz verursacht einen Unterschied der Leistung zwischen Luxemburgern und Ausländern. Um den Unterschied zu beseitigen, weist man deshalb darauf hin, dass in einigen Klassen auf Französisch unterrichtet werden sollte. Allerdings gibt es auch einen Widerstand dagegen. Diese Leute ängstigen sich, dass die Einrichtung eines Französischkurses zum Verlust der dreisprachigen Identität Luxemburgs führt. Bei der Sprachwahl dem Wunsch der Gesprächspartner zu entsprechen, ist für Luxemburger eine Alltäglichkeit in der Kommunikation, aber mit inneren Konflikten verbunden. Vor allem die Ausweitung des Französischen führt zum Zerfall der luxemburgischen Dreisprachigkeit und damit der luxemburgischen Identität, weswegen man die schnelle Expansion des Französischen kritisch betrachtet. Momentan verfolgt die Regierung die Politik, bei der Vorschulerziehung die Luxemburgisch-Kenntnisse der Kinder zu verbessern, damit sie in der Grundschule einfacher lernen können. Von den Kindern erwartet man, dass sie durch kollektive Aktivitäten praktische Luxemburgisch-Kenntnisse erwerben und ihr Zugehörigkeitsgefühl zur luxemburgischen Gesellschaft vertiefen. Weil Luxemburger gesprochenes Luxemburgisch und geschriebenes Deutsch miteinander kombinieren, hängt die Aufrechterhaltung der Dreisprachigkeit davon ab, wie man die luxemburgische Sprache beherrscht.

In Kapitel 3 behandle ich die Akzeptanz von Flüchtlingen nach der europäischen Flüchtlingskrise von 2015 und das Dilemma der Luxemburger. Da man in Luxemburg mehrere Amtssprachen hat und fast die Hälfte der Bevölkerung aus Ausländern besteht,

sind Mehrsprachigkeit und Vielfalt seine Identität. Und indem er bei der Sprachwahl dem Wunsch der Gesprächspartner entspricht, unterstützt der Luxemburger diese Identität. Heutzutage sind Flüchtlinge jedoch Muslime, und deren Muttersprache ist in vielen Fällen Arabisch. Infolgedessen funktioniert keine der in Luxemburg verwendeten Sprachen. Außerdem sind 85% der in Luxemburg lebenden Ausländer aus anderen EU-Mitgliedstaaten. D.h., sie haben viele Gemeinsamkeiten nicht nur in den Sprachen, sondern auch hinsichtlich der Geschichte, der Bräuche und der Religion. Die Luxemburger Gesellschaft ist eigentlich eine sehr europäische und homogene. Luxemburger stehen vor dem Dilemma, ob sie ihrer Mehrsprachigkeit und Vielfalt ein Limit setzen sollte. Die Akzeptanz von nicht-europäischen Arabisch-Muttersprachlern wird ein Prüfstein der luxemburgischen Identität mit Mehrsprachigkeit und Vielfalt sein.

Diese Leute erscheinen schwer integrierbar. Doch wenn man die Situation aus einem anderen Gesichtspunkt betrachtet, sind sie nicht-romanische Muttersprachler, d.h., sie gleichen den Luxemburgern. Die Kinder von Flüchtlingen lernen in einer Sonderklasse Luxemburgisch und Deutsch, und dann werden sie in die reguläre Grundschule aufgenommen. In der Grundschule werden sie Französisch mit den anderen Kindern lernen. Für arabische Muttersprachler ist das natürlich nicht leicht. Aber für Luxemburger sind sie viel wünschenswerter als die romanischen Muttersprachler, weil sie als Sprecher des Luxemburgischen, nämlich als zukünftige Sprecher in drei Sprachen, ins traditionelle Schulsystem aufgenommen werden können. In Zukunft werden die Flüchtlinge zur Mehrsprachigkeit Luxemburgs mehr als Romanischsprechende beitragen.